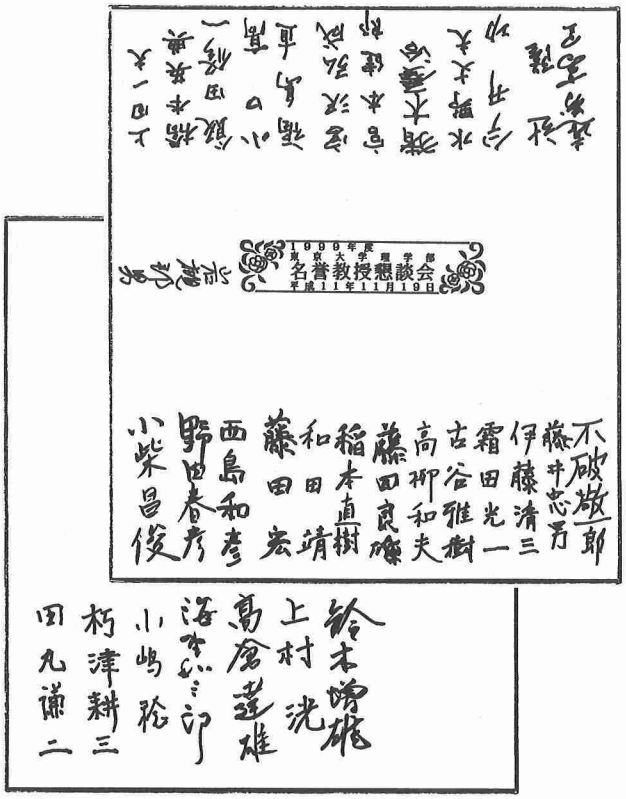
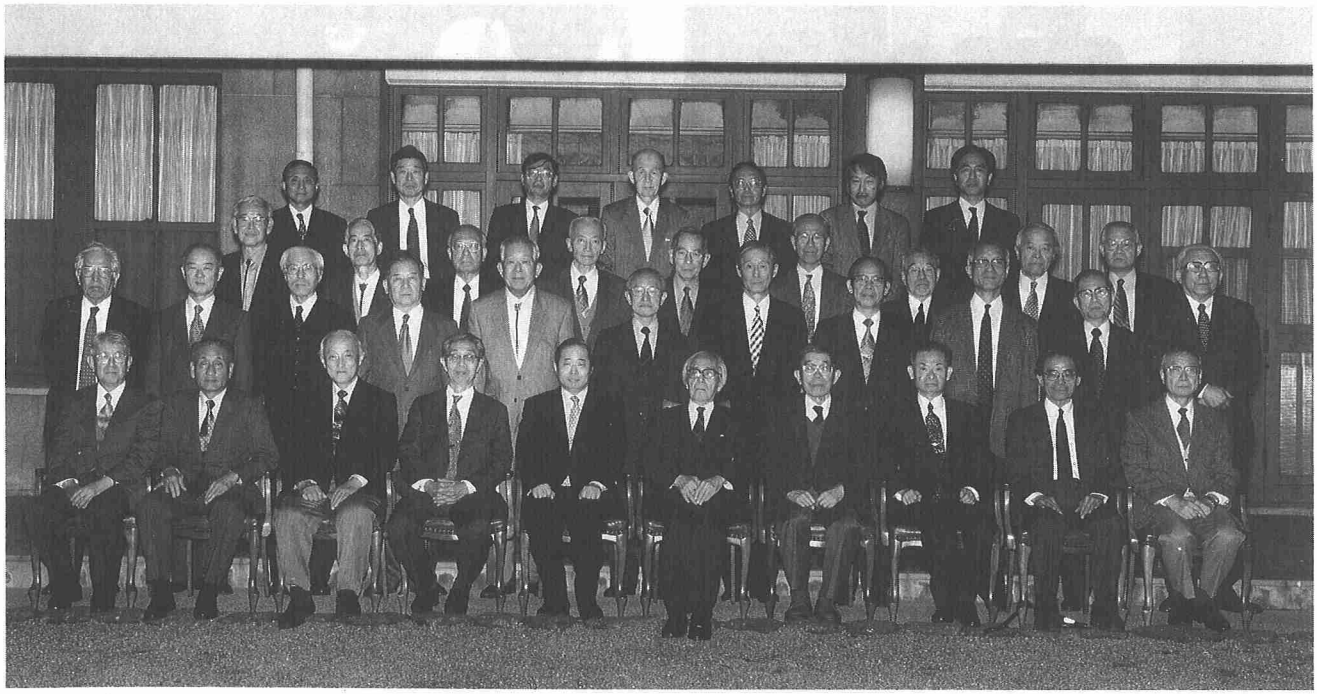
平成11年度理学部名誉教授懇談会開催される

11月19日(金)午後5時30分赤門学士会分館において、恒例の理学部名誉教授懇談会が、33名の名誉教授の先生方にご出席いただき、理学部からは小間学部長、濱野評議員、植田事務長が出席し開催された。

最初に地球惑星物理学専攻の山形俊男教授による「海の気候」と題した講演が行われ質疑応答があり、中庭で写真撮影が行われた。

引き続き懇談会に移り、小間学部長の挨拶と理学部の近況報告、ご出席の名誉教授の最長老である藤田良雄先生のご発声による乾杯の後、名誉教授全員から、ご近況や現役時代の思い出話等をお話しいただき、和やかに会は進行し、最後に小間学部長の閉会の挨拶があり、午後8時過ぎ散会となった。





東京大学理学部名誉教授懇談会　　平成11年11月19日　於・学士会分館

平成11年度理学系研究科技術シンポジウム実施される

9月17日午後1時より、理学部旧1号館150号室において、「第16回理学系研究科技術シンポジウム」が開催された。

この技術シンポジウムは、理学系研究科に所属する技術職員が日頃の業務や研究の中で得られた成果を発表する場で、毎年開催され今年で16回を迎えた。

はじめに、技術部長でもある小間研究科長の挨拶があり、引き続き各技術職員による発表に移った。今回は口答発表ばかりでなくポスター発表も行われ、盛会であった。当日のプログラムは次の通りである。

口答発表

1．珪酸塩中のリンの分析　杉浦　俊勝（化学）
2．日本庭園池浚渫及び護岸改修工事報告　山口　正（植物園）
3．放射菌（Streptomyces parvulus）由来コラゲナーゼの精製及び性質　櫻井　康子（生化）
4．サイクロトロン運転と周辺機器　山崎　則夫（原子核）
5．原子核科学研究センターにおける重イオン加速　大城　幸光（原子核）
6．酵母遺伝子の機能解析　小口　智子（植物）

ポスター発表

1．小笠原の絶滅危惧植物を救う　平井　一則（植物園）
2．日本庭園周辺植生改良報告　高橋　兵部（植物園）
3．高含有ハロゲン化合物の分析（その2）　関　俊子（化学）
4．パソコンとインターネット　樫村　圭造（物理）
5．東京大学総合研究博物館地理部門の紹介と最近の活動　栗栖晋二（地理）

また地理学教室の米倉教授による「サンゴ礁はいつ・どのようにしてできたか？」は美しい珊瑚礁は数千年の時を経て造られていることや珊瑚礁の掘削調査から明らかになったこと等、貴重な講演に参加者は興味深く耳をかたむけた。

シンポジウム終了後、懇親会が行われた。近藤教授の乾杯の挨拶ののち研究科長、米倉教授を交え和やかに歓談し、技術職員の間の交流も持たれ来年の盛会を祈って閉会した。

技術職員研修「極微少領域の分析技術関係」が実施される

11月30日(火)から12月2日(木)までの3日間にわたり、平成11年度東京大学技術職員研修のひとつである「極微少領域の分析技術関係」が初めて理学部・理学系研究科で実施された。

これは全学の技術職員に対し、極微少領域分析技術の基礎を修得させ、資質の向上を図ると共に、技術の継承を目的に企画された研修である。この研修には受け入れ定員をはるかに越える申し込みが全学からあった。今回は、3部局6名が受講した。研修内容は、講義と実習が行われた。実習では、地質学専攻の微少領域電子線分析装置と鉱物学専攻の電子顕微鏡、走査型電子顕微鏡を用い、開聞岳火山のかんらん石、桜島火山の斜長石、納沙布岬貫入岩体の輝石の分析を行った。研修生は、新たな分析機器に戸惑いながらも無事終了した。また、この研修を通して研修生相互の今後の技術情報交換のきっかけの場、になったこともこの研修の成果の一つである。

なお、講義の内容はつぎの通りである。

ＴＥＭ，ＳＥＭによる極微少領域分析の必要性
　村上　隆　教授（鉱物）
極微少領域分析装置を使った新鉱物の発見
　小澤　徹　講師（鉱物）
ＥＤＳ，ＷＤＳ，ＴＥＭの原理と分析時の注意点
　吉田　英人　技術官（地質）・立川　統　技術官（鉱物）
試料作成法
　立川　統　技術官（鉱物）
分析試料採集の実際例
　立川　統　技術官・吉田　英人　技術官
新しい結晶学（五角形のふしぎ）
　杉山　和正　助教授（鉱物）
太陽系形成過程解明に必要な極微少領域分析について
　高橋（永原）裕子　助教授（地質）

挨拶を行う小間研究科長

講義を行う吉田技術官

理学系研究科長（理学部長）と理学部職員組合との交渉

1999年９月20日、10月19日に小間研究科長、植田事務長と理学部職員組合（理職）との間で定例研究科長交渉が行われた。主な内容は以下のとおりである。

１．昇級・昇格等

９月、10月の交渉で理職は今年度の特昇について状況を尋ねた。事務長は９月に、学部からの推薦は終っているがまだ現段階ではきていないと答え、10月の交渉でもまだであると答えた。理職は判り次第知らせてほしいと要求した。

10月の交渉で理職は12月の勤勉手当配分比率について、98年６月期から数え最低4回に1回は70/100であると今年5月の交渉時に事務長が答えている事に言及した。また特に若い人が過去３回共60/100で残っているので必ず12月には70/100とするよう重ねて要求し、理職組合員（職員）の勤勉手当支給率についてのリストを手交した。

10月の交渉で理職は10月１日付の昇格者について尋ねた。事務長は辞令は交付済で、技官１名、事務２名の３級昇格があったと答えた。

事務職員

９、10月の交渉で理職は事務主任の６級昇格要求についての動きを尋ねた。この事務主任の前任者は定年退職２年前で６級になり、昨年は生物科学でも実現していることについて理職は言及し、長年専攻事務室で業務にあたった事務主任をぜひ６級にするよう重ねて要求した。事務長は10月の交渉で、上位級は発令が遅れることもあると回答した。

技術職員

９月の交渉で理職は、技術専門官７級は例年12月頃くる、部局からの推薦が重要であることを訴えた。また理学部には７級の有資格者が数名おりシンポジウムや研修で技術向上に努めていることにも言及した。

図書職員

９、10月の交渉で理職は、行（二）から行（一）に振替になり、年齢と号俸の条件は満たし、在級年数が５年を経過した図書職員について、同年齢以下の図書職員が既に５級昇格を果たしているにもかかわらず４級のままであるのでぜひ本年度中の5級昇格を実現するよう重ねて要求した。

２．独立行政法人化

９月の交渉で理職は東大総長宛に９月17日付で提出した『国立学校の「独立行政法人化」問題について（要望書）』のコピーを科長に手交し、独法化についての状況と見解を尋ねた。これに対し科長は、６月迄の文部省は2003年に結論を出す方向で大学の独法化についての議論は行っていなかったが、内閣は“公務員定削25％・財源削減30％”という方針であり、H13年度から実行予定、議論を始めないと突然政府主導の独法化が行われる恐れが出てきたと説明した。また科長は、国大協では第一常置委員会・小委員会が議論を始めているが、大学は議論を始めたばかりで公的な意見は出せない、８月11日に総長が記者会見し通則法による独法化には反対であると発言していると説明した。

科長は、理学系としては意見がまとまらないが基礎サイエンスが守られ、通則法が変われば独法化も考えられると発言した。理職は７月の理学部教官間での討論の内容を尋ね、科長は意見をまとめる段階まで行かなかったが、通則法をそのまま受け入れることはできない、基礎研究を守る手立てが必要などの意見が出たと答えた。

理職は職員の身分についての見解を尋ね、科長は独法化する場合、積極的に人事異動ができる仕組を考える必要があると答えた。また科長は文部省・各大学が個々バラバラになり、政治主導で決められ大学の意見が確保できなくなることを懸念すると答えた。

10月の交渉で理職は、９月に出た文部省案は国大協案が後退した形だがどういう見解か、また文部省から各大学への説明後、東大部局長会議でどういう反応や議論があったのかと尋ねた。これに対し科長は、文部省は国大協に非常に近い案を出したが、むしろ国大協よりの案ということで行政改革推進本部がどの程度文部省案を受け入れるかを危惧する、文部省案よりもより通則法に近いものが行革本部から出るのを阻止することが大事であると答えた。

また科長は、他大学との人事交流は今後も必要であり、「双方の大学としてのあり方」がかけ離れたものにならないよう協力連携が大切である。職員についても同様に、独法化で別組織になっても人事交流の可能性は残しておいたほうがよいと答えた。

理職は最近の情勢を尋ね、科長は11月に国大協総会があり審議が進む、また７月に発足した東大内の理想形態を考えるWGの報告書もまもなく出るだろうと答えた。また科長は大学は数十年先の人材を育成しており、組織が悪い方向に変化することは技術立国日本の芽を摘むことになると答えた。

理職は10月末に全国理学部長会議があると聞いたが、その中で独法化について話し合う予定はあるかと尋ねた。科長は話に出るだろうと答えた。理職は独法化した時の職員の身分保障悪化や定員削減を憂慮していると発言し、科長は一方的に効率化を計られないよう措置が必要であると答えた。理職は理学部でまた討論の場を持つ予定は

あるかと尋ね、科長は要望が出たら開催を考えるが今は予定がないと答えた。

理職は文部省で10月に独法化についてブロック毎の会議を持っているが情報は得ているかと尋ね、科長は前回の全大学への説明会では時間が足りなかったのでより詳しい質疑応答や話し合いをするようだと総長から報告があったと答えた。理職は職員の身分変化の可能性について尋ね、科長は文部省は公務員として残る案を示していると答えた。

理職は校費の大幅削減が予想されるが対策等どう考えるかを尋ね、科長は一律に校費削減ということはなく、最低額はどの大学にも保障しそれ以上は個々の大学の努力に応じて出すだろうと答えた。理職は法人化すると予算が人件費込みと予想され定員外職員の身分保障は切り捨てられる危険性があると発言し、これに対し科長は人件費と身分保障は別であり、人件費はフレキシブルに運用したいと答えた。

3．積算校費配分の変更について

9月の交渉で理職は状況について尋ね、科長は12年度の概算要求で文部省が教官及び学生当りの積算校費を理系は文系並に減らす方針であり、浮いた部分を大学全体で再配分することになると答えた。また科長は来年度分については今年度並にするよう総長に要望したと答えた。

10月の交渉で理職はH13から校費大幅削減が予想されるがこれにどう対処するのかと尋ね、理職として校費改悪には断固反対であると述べた。これに対し科長は総長は校費配分が重点化されるので今まで以上に東大では予算を取りたいと考えていると答えた。

理職は全国理学部長会議でこの件が議題に上る予定はあるか、なければ議論して欲しいと要望した。科長は時間的制約があるが尽力したいと答えた。

理職は理学部は基礎研究を扱う分野であり校費削減で困窮すると訴えた。また理職は文系学部の反応はどうかと尋ね、科長はやはり反対のようで、理工対文系という構図ではないこと、また文部省は予算が人員当りで減っていくのを押さえたい、また学長の裁量権を増やしたいと考慮していると答えた。理職は全学の予算について知る手段はあるかと尋ね、科長は「東大の現況」にかなり記載があり、もし独法化すれば予算についてはより説明責任が増すだろうと答えた。

理職は時間雇用の職員は校費でしか社会保険の保障がなく全学的に人件費に充てる校費について考慮すべきである、また総長采配で部局に予算を降ろすのは不公平が出ることを危惧すると訴えた。科長は東大では学部長会議を頻繁に開き、総長と部局との意志疎通は十分計られている、部局から評議員が出ているので不公平が出ることはないと答えた。

4．その他

9月の交渉で理職は教官の定年延長についての現状を尋ねた。科長は、2002年3月定年になる教官から1年延長し以後順次行い12年間で65歳定年とする提案が7月に総長からあったと答えた。また科長は、この件は今年11月までに決定予定であり、東大の内規を変えれば可能である、教官の範囲は助手以上であると答えた。理職は年金支給が60歳から65歳に延びる事に対応したのかと尋ね、科長はそのとおりであると答えた。また科長は、定年延長になった為次世代の人材が取れず学問研究に支障をきたす場合は、東大全体の定数から対処したいので申し出るよう総長から説明があったと述べた。

理職は職員は人勧で再任用が示されたが全員というわけではないと述べ、職員も再任用を希望している者は年金支給年齢まで勤務できるよう要望した。また理職は科長に対し学部長会議や事務長会議でその旨発言することを要望し、科長は了承した。

9月の交渉で理職は柏キャンパスに資料共同利用センター（仮称）が設置される計画案が7月の図書行政商議会附属図書館次期計画特別委員会に出されたが、何か情報を得ていないかと尋ね、部局図書職員からも計6名定員を吸い上げる案があり、部局の労働強化に繋がることを憂慮すると述べた。科長は今後注意を払って行きたいと答えた。

9月の交渉で理職は、10月に図書館システムの更新があるが、現有レンタル機で新システムを動かすとレスポンスが非常に悪化する為、より精度の高いパソコンを購入することで窮地を凌ぎたい、職員から要望が出た際には尽力して欲しいと訴えた。これに対し科長は仕事に必要であれば備えるのが良いと思うが、予算とのからみがあると答えた。

また10月の交渉でも理職は上記の件について引き続き訴え、9月の交渉後図書掛経由で科長・事務長宛に提出した要望書の回答を要求した。これに対し科長がまだ手元に渡っていないと答えた為、理職は科長に「高速端末の配置について（要望書）」コピーを手交した。理職は、業務改善に関する事なので当局として尽力してほしいと要求した。

事務長は全学的な図書館予算での配置計画はないのかと尋ね、理職は全図書館・室の一部にしか高速パソコンは配置されず、理学部へは1台もこない、全国規模の目録作成他の業務を行っており専攻独自の業務を行っている訳ではない事を重ねて訴えた。科長は新システムの稼動状況をみてほしい、やはり問題があれば、できることはしたいと答えた。

10月の交渉で理職は理職書記局整備に関する要望書を数回提出しているがまだ改善されていない、理職書記局隣の会議室には暖房設備がないので早急に手当してほしいと訴えた。

人事異動報告

(講師以上)

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
物理	助教授	酒井広文	11.10. 1	転任	通商産業省工業技術院より
ﾈｯﾄﾜｰｸ	講師	稲葉真理	〃	昇任	情報学専攻助手より
化学	助教授	菱川明栄	11.10.16	〃	講師より
〃	講師	島田敏宏	11.11.16	〃	助手より

(助手)

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
化学	助手	遠田浩司	11.12.13	研究休職	11.12.13～12.9.30

(併任)

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
物理	助教授	小形正男	11.10. 1	併任	本務：東京大学大学院総合文化研究科

博士（理学）学位授与者

平成11年9月20日付学位授与者（10名）

種別	専攻	申請者名	論文題目
課程博士	物理学	溝井　浩	多重飛跡測定用ガス検出器を用いた、天体核反応^{8}Li(α ,n)^{11}B の測定
〃	地球惑星物理学	清田　馨	非平衡普通コンドライト隕石の窒素同位体研究
〃	〃	藤江　剛	屈折および反射波を用いた走時インバージョンの開発と三陸沖プレート境界の地殻構造への適用
〃	地質学	アントン・ダナ・コリナ	北アプセニ山地マウントマーレ花崗岩類の岩石記載、地球化学および同位体による研究―過アルミナマグマの進化―
論文博士	情報科学	馬見塚　拓	生物学上の配列解析のための確率的知識表現と機械学習手法の研究
〃	物理学	小林研介	電子間相互作用と電子格子相互作用の競合する金属酸化物の分光学的研究
〃	地球惑星物理学	矢田部　学	残留重力場の定式化と月・フォボスの形状に関する研究への適用
〃	化学	礒部正彦	量子スピン系物質 AV_2O_5 (A＝Li, Na, Cs, Mg, Ca)の合成と構造、物性
〃	生物科学	徐　仁和	アフリカツメガエル初期発生の神経誘導と中胚葉誘導に関する分子生物学的解析
〃	〃	井上俊介	出芽酵母1，3－β－グルカン合成酵素の構成サブユニットに関する分子生物学的研究

平成11年9月30日付学位授与者（8名）

種別	専攻	申請者名	論文題目
課程博士	物理学	須崎友文	高分解能光電子分光による近藤絶縁体の研究
〃	〃	杤久保邦治	300m基線長ファブリペロー共振器のアラインメント制御機構の開発
〃	地球惑星物理学	島岡晶子	Be同位体比からみた東北日本弧火山マグマへの海洋底堆積物の寄与
〃	〃	久保田尚之	熱帯海洋上の対流活動の日変化
〃	化学	權　哲	能動輸送膜蛋白の関わる生物活性物質の分離及びスクリーニング法
〃	〃	干　泳	シクロプロペノンアセタールの金属錯体による環開裂反応を用いる新規反応の開発
〃	生物科学	得字圭彦	新遺伝子導入系を用いた不定胚形成機構の解析
〃	地質学	楊　東生	中国湖南省中部に位置する錫鉱山超大型アンチモニー鉱床の成因に関する地質学的・地球化学的研究

平成11年10月18日付学位授与者（2名）

種別	専攻	申請者名	論文題目
課程博士	地球惑星物理学	鍵本　崇	黒潮の流量変動の数値的研究
論文博士	物理学	常包正樹	生体光情報計測のための広帯域波長可変コヒーレント光源の研究